
ソードアートオンライン シリカの冒険

MITUKAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアートオンライン シリカの冒険

【Nコード】

N7634Z

【作者名】

MITUKAN

【あらすじ】

ソードアートオンラインのスピノフ的な作品です。

主人公はタイトルにあるようにシリカです。

設定は文庫1〜8の設定に準拠しつつ、オリジナル設定で補完してあります。

一度は削除した作品ですが、友人に勧められ書きだめ分だけ再投稿します。

苦情、批判は感想にて受け付けます。

スキル（前書き）

再投稿です。お騒がせしてもうしわけございません。

スキル

スキル

アインクラッド第39層

2024年2月

「これで決める！」

街道から外れた林の中で少女の声が響いた。

少女は眼前の猿人 アグリーエイプ に5連撃の短剣スキル ファ
ツドエッジ を叩き込んだ。

2撃目と3撃目に発動したクリティカルヒットにより、全弾を浴び
る前に猿人はオブジェクトと化し、
爆散した。

「きゅるっ」

戦闘の終わりを確認した小さなドラゴンが彼女の右肩に止まり、わ
ずかに減ったHPを回復させる。

「ありがとう、ピナ」

左手で小竜の頭をなでながら、彼女はやさしく微笑んだ。

彼女の名はシリカ、右肩に乗る小竜 フェザードラゴン をタイム
したことにより

竜使いシリカ として名を知られるプレイヤーだ。

シリカは今日、ソロでここ39層のフィールドで狩りをしていた。

このフィールドに出現するモンスターは30層〜38層で出現した獣人の上位版だが、

単体でしか出現しないので、Lv45のシリカにとっては組みしや
すい相手だった。

さらにリーチの短い短剣にとって、表面積の大きい人型は獣型より
も格段に当てやすいという
メリットもある。

「キリトさん…」

シリカは右手に握る短剣を眺めながら、この情報を教えてくれた人
の名をそつとつぶやいた。

彼、キリトは最前戦で戦う攻略組と呼ばれるトッププレイヤーの一
人で

シリカとピナの文字どおり命の恩人であった。

迷宮で道に迷い、ピナを死なせ、自信も命の危険にさらせていたの
を助けられたばかりか、
上層のダンジョンでピナを復活させるアイテムをとるのにも協力し
てくれた拳句、

帰路に遭遇したオレンジギルドのPKをも撃退してくれた。

（この件は彼が最前戦から下層においてきた理由でもあったのだが
…）

シリカの右手に握られた短剣　イーボン。ダガー　もその折に彼か

らもらった物だった。

事後、最前戦へと戻る彼にフレンド登録はしてもらったが、まさに命がけて戦う彼にたわいもないメールをおくるのはためらわれ、

丸一日迷った挙句、「ピナをまもれるよう、強くなるにはどうしたらいいか？」

といった無難だともわれる相談を試してみた。

そのメールにキリトはすぐに返信（メールが届いた瞬間、ピナに見せながら宿屋のベッドで飛び跳ねたのは内緒）をしてくれた。

そこには推奨スキルとその効果や戦術、そして効率のよい狩り場情報書かれてあった。

今、シリカがソロでフィールドに出ているのもそのスキルをあげるためだった。

「うん、だいぶ距離もつかめるようになったね。」

シリカは笑いながら一本のスローピックを拾いあげた。

キリトお薦めのスキルのひとつに 投擲スキル が含まれていたのだ。

これまで投擲スキルはそのダメージの低さや片手がフリーになる武器の少なさなどの理由もあいまって、

積極的にスキルをあげるプレイヤーはほとんどいなかった。

だが50層が攻略されると店売りに状態異常の効果をもつ投擲武器が並ぶようになり、
にわかに脚光を浴びだした。

投擲武器には 切断、 打撃、 貫通 とに種類が分けられるが、なかでも

貫通属性の武器と状態異常は相性がよかった。

特に麻痺は麻痺Lv1のピックでもフィールドモンスターなら貫通の継続効果により

ピック一本で一分間も麻痺状態にできるのでその恩恵はかなりのものであった。

(ちなみにボスモンスターには状態異常はきかないので、攻略組では実はそれほど重要視されていない。)

そしてシリカのメイン武器である短剣との相性もまた良好であった。

短剣のデメリットにリーチの短さがある。それゆえに敵に気づかれるとまず間違いなく相手に先制を許してしまう。

その点、離れたところから放つ投擲スキルは先制攻撃にもってこないのだ。

それに短剣なら他の大型武器と違い、武器を構えながらも投擲できる

(スキルなので利き手でなくても命中率等に影響はしない)のもメリットだ。

大型武器で使用する場合、まず武器未装備で投擲、その後、あら

ためて武器を装備、それから攻撃と手順を踏まなければならない。AGIがのびにくい大型武器プレイヤーにとってこれはかなりの時間のロスとなる（これも攻略組内で使用者が少ない理由）。

その点、AGIに負担の少ない短剣にとっては武器装備したまま走れるというのが魅力のひとつである上、短剣使いのステータスはAGIが高いので問題ない。

また手数が多さでダメージを稼ぐ短剣でも一分間という時間は格下の相手を屠るのに十分すぎる時間となる。

あと 投擲スキル の利点にスキルアップのしやすさがある。

場所、相手を問わず、とにかくものを投げて命中させればスキルがあがるのである。

このためポリウムゾーンの主街区では今ダーツがひそかなブームとなっている。

シリカはピナの好物であるナッツを投げ与えることでスキルあげをしている。

（ピナも遊んでもらえていると思うのか、すごく喜んでいる。）

とにかく投擲スキルのレベル上げは順調に進んでいるのだが、もうひとつのお薦めスキルがシリカの悩みの種だった。

「はあ、人前ではさらせないよ〜これ」

威力や効果には問題ないのだが、乙女としてはおおいに問題があるスキルであった。

スキル（後書き）

削除前に書きためていた分を含め、まとめて再投稿することになりました。

なので、削除前にみみみ様よりお教えいただいた公式同人の設定には沿っていません。

誤字、脱字、苦情、批判等は感想にてお願いいたします。

タイム 1

タイム 1

アインクラッド第32層

2024年3月

シリカは今、32層のフィールドにきている。

シリカ自身に目的はなく、協力を要請されたからである。

要請者はリアルでは女子大生だという女性二人。Lvはどちらも47とシリカよりも高い。

両手大剣を背負った赤髪シヨートがケイ、メイスを杖がわりに歩いている黒髪ロングがユリという。

安全マージンを考慮しても3人には若干低めな層に出張ってるのは、ケイ、ユリ二人の

お目当てのものを探すためである。

そもそも事の発端は二人がシリカに声をかけたことから始まる。

* * *

その日もフィールドでソロ狩りをしていたシリカは主街区にもどった途端のパーティ勧誘を

丁寧な断り、宿に向けて歩いていていた。すると前方から、

「あゝ、シリカちゃん、はっけえん〜」

と、ちよつと間延びした声と、

「シ、シリカちゃん、お姉さんと、お姉さんと、ハア、ハア、…」

と、ちよつとあぶなそうな声が聞こえてきた。（単に走りながらなので息がきれただけだった）

シリカは若干引き気味ながらも

「なにか御用でしょうか？」

丁寧 answered。

ピナのおかげ（？）でいやがおうでも目立つシリカに見知らぬ他人が声をかけてくることは日常茶飯となっている。

その際、相手は間違はなく年上（シリカはナーブギアの年齢制限ギリギリ）なので

丁寧な対応を心がけている。

「あのね〜、シリカちゃんにねえ〜、私達にい協力してもらえないかな〜、ってお願いなんだけど…」

黒髪ロングのお姉さんがのんびりした口調で告げてきた。

（赤髪ショートのお姉さんは横でまだハア、ハアいつてる）

シリカが断ろうと返事をする前に、復活した赤髪ショートのお姉さんが、

「シリカちゃんに私達のテイムを手伝って欲しいの！」

いわく、32層に黒猫型のモンスターが目撃されたらしい。

子猫サイズそのモンスターはテイムできるのではないか？といった噂がひろまっているそうだ。

ケイとユリと名乗った二人は、幸い32層にはめぼしいダンジョンがなかったため

ほぼ素通り状態だったのでチャンスはある！とみて二週間通いつめたらしい。

（テイムは同種のモンスターを狩りすぎるとできないのではと言われてる。）

だが、結果はからぶり。大型猫種のモンスターに追い掛け回されては逃げる日々だったそうだ。

そこで自分達はモンスターに手を出せないので用心棒を雇うことにしたらしい。

テイムという言葉にひかれたシリカは少し話してみる気になり、

「あの、他にギルドのメンバーはいらっしゃらないのですか？」

と尋ねてみた。

「あんな、むっさい連中連れて行って、かわいい子猫ちゃんがでてくるわけない！」

ただちにケイに断言されてしまった。

二人は迷宮探索のときには男性メンバー三人を加えた五人でパーティーを組んでいる。

だが、それも月2、3回程度で普段は別行動をしているそうだ。

(男性三人は同じ大学のゲームサークルのメンバーとのこと)

「では、何故、私なんですか？」

まあ、誰と行くかはその人の自由だし、とシリカは一番気がかりなことを尋ねる。

「それはシリカちゃんが有名なビーストテイマーだからだよ！」

ビシツと擬音が聞こえそうな勢いで指差しながらケイが言いきった。

だから、なに？と首をかしげるシリカに、

「きゅる？」

同じ動作で首をかしげるピナ。

「つまり、タイムに成功したシリカちゃんならタイム可能なモンスに出会う確立が高いってことよ。」

と、ドヤ顔のケイ。

いや、それ根拠ないですからと心の中で反論していると、

「それにいっ、タイムしていない人があ、先に会っちゃって、タイムされたらっ、くやししいいっ」

とても心配しているとは思えない口調でユリ。

「その点、すでにタイムに成功しているシリカちゃんなら安心だし、Lvも申し分なし。」

パーティは組まないからドロップアイテムは全部シリカちゃんのものだし、

見つかるまでご飯おごるよ」

根拠はともかく理由としては納得できる内容だった。

なにより現実で猫を飼っていたシリカなので子猫のモンスターがいるならぜひ見てみたい。

それにタイムに成功する人が増えたなら自分に対する注目も減るのではとの打算もあつて、シリカは結局引き受けることにした。

「ありがとうシリカちゃん！ なら明日9時にここのゲート前に集合ね。」

「ふふふ、こんどこそあゝ、クロ猫げつとだぜい！」

ユリのセリフは昔のモンスターを集めるアニメのセリフらしいが、いまだに使われていて、シリカもセリフだけは知っていた。

「あつ、そうだシリカちゃん、時間あるならそのドラゴンをタイムした時の話、聞かせてくれない？」

「ご飯おごるから、ね？」

「あゝ、それはあ、いい考ええ。っていつか、ドラゴン、さわりたい」

「そんな話すよつなほどのこともないんですけど…」

「まあ明日から一緒にフィールドにでるわけだし、親交を深めるって意味でもさっ」

「ねえ、そうしましょうよ、っていうか、シリカちゃんも、さわり、たい」

えっ、今の発言はなに？とおろおろしたシリカの両脇から二人がそれぞれ手をまわし、

「よしっ、レッシッジャー…」

「ジャー…」

掛け声と共に二人にひきずられていくシリカであった。

タイム 1 (後書き)

ケイとはユリはダーティペアです。
アニメ版ではなく、安彦良和氏のイラストのほうです。

タイム 2

タイム 2

3 2層は主街区とボス迷宮区を除くすべてがアフリカのサバンナを思わせる草原というすっきりした構成だ。

なので最初に訪れた攻略組はまっすぐ迷宮区へと足を運んだ。

後続組は一応隠しダンジョンがないか探索してみたが、地下迷宮なんてものも存在しなかった。

ただこのフィールドでドロップする毛皮や肉などはランクが高く生産職には人気がある。

「きゅー！」

ピナが力強く鳴いた。この鳴き方はモンスターの接近を知らせるものだ。

ピナの声に敵モンスターも気付かれたことを認識し、伏せていた草原から身を起こし、

一気に突撃をしかけてきた。

襲いかかってきたのは、ネメアズシーザー、獅子型のモンスターだ。

シリカは右手で短剣を抜きつつ、左手で腰に下げた袋から、スモーク・ストーンを取り出した。

これは打撃属性の投擲武器で敵に当たると煙幕が発生し、一時的に照的を見失うという効果がある。

普段使用している麻痺効果付与のスローピックも持参しているが、持てる数が多くない上、一度使うと麻痺効果が消えてしまうので、複数のモンスターが出現した時のために温存している。
(普通のピックとしては使用可能。ただし同ランクのピックより威力はさがる)

ちなみに効果のきれたピックを武器屋に持ち込むと、購入価格の半額で効果を再付与してもらえる。

今回使用する スモークストーン は使い捨てではあるが、その分単価がすこぶる安く、数もピックの5倍は所持できる。

今回の依頼は長丁場が予想されるので節約に越したことはないというわけである。

ただこの煙幕にも欠点があり、あんまり近くで当てると自分や味方をも巻き込んでしまうことと、屋外フィールドだと効果が長続きしないどころか、風向きによってはまったく効果がないなんてこともある。
(アインクラッドは城内なのに何故か風が吹く)

幸い今は無風なので、距離を詰められる前にと、シリカは素早く投擲スキル サイドスローシュートを
繰り出した。

このスキルは基本技 シングルシュート よりも素早いモーショ
ンで投げられるので普段からメインで
使用している。

狙い通り、獅子の鼻づらに当たった石は、これも狙い通り獅子の
突進を止めることに成功した。

シリカは獅子の側面に回り込むと、突進技から高速連続技へとつ
なく怒涛のラッシュを繰り出した。

ピナも煙幕が切れる絶妙のタイミングでバブルブレスを吐き、獅
子の幻惑を継続させる。

結局、獅子は一度も反撃することなくポリゴン片と化した。

「ふわあゝ、やっぱりシリカちゃんすごいわ！ 分間あたりのダメー
ジ量ならあたしとそんなに
かわらないんじゃない？」

「それにいゝ、 スモーク・ストーン の効果もすごいですうゝ。
わたしがあゝ、なぐるよりいゝ、
効果的かもあゝ」

「いえ、どちらも一撃の重みが無いですから、相手をひるますこと
ができませんよ。
それにスモークは効かない場合もあるし、動きを止めないとここま
で連撃が続けられません。」

答えるシリカだが、これはキリトの受け売りだったりする。

「あとは黒猫を見つけるだけね！うん！今日はなんかいける気がするー！」

「うん、いけそうかなあ、いるといいなあ、エへへ」

ずいぶん歩いてきたにもかかわらず、ハイテンションな二人だった。

じつはここまで戦闘はほとんど無かった。

ピナの警告があると相手に気づかれるまではできるだけ隠れてやり過ごしてきたからである。

いくら別行動とはいえ倒しすぎるのは影響がでるかもしれないのと、

間違つて黒猫に先制攻撃をしてしまうと目も当てられないという理由で。

なのでシリカはちょっと退屈していた。なにせ歩けども、歩けども見渡すかぎりサバンナである。

はじめは非アクティブの草食系MOBになこんでいたのだが、それも数時間で見慣れた風景となった。

代り映えのしない景色の中、いるかどうかもわからない子猫を探すのはかなり忍耐を要求されるものなのだとしり力はややうんざりしながら思った。

「二人はよく二週間もかよえたものね…」

シリカは半分あきれ、半分感心しながら後ろを歩く二人を振り返った。

いまだにテンションあげあげのケイが気付いて、

「む？どーしたのシリカちゃん？」

「い、いえ、今日はどの辺まで行くのかなあと…」

シリカは慌ててごまかした。

「うーん、そうね、帰りもあるし、向こうにオアシスがあるからそこまでいったら戻りましょう。」

ケイが指さす方向には小さく木らしきものが見えるだけだった。

まあ見えてるだけマシかなと前向きに考えようとするシリカであった。

*

*

*

その後はMOBを上手くやり過ぎ（当然、黒猫もみつからず）、無事オアシスに到着した。

「はあ、やっとここまで来たのに出てこなかったわねえ。」

ここにきてようやくテンションが下がり始めたケイがため息をつ

くと、

「まあだあゝ、初日ですからあゝ、これからですよあゝ」

こちらはまだまだやる気満々なユリだった。

「二人はこれまでどの辺まで調べたんですか？」

オアシスの水を飲んでるピナから目を離し二人に尋ねるシリカ。

「ん？どの辺もなにも入口付近ですぐ引き返してたし。」

「ライオンさんやあ、チーターさんがあ、おっかけてくるんですうゝ。とゝっても、こわいんですうゝ」

……戦闘禁止ならそりゃたしかに怖いよね……

タイム 3

タイム3

日が暮れる前にと、ゲートに向け戻る三人と一匹。

帰路に出くわしたのは、三頭の猫型モンスター ポイントキャット。
ト。

名前こそキャットとついているが見た目はヒョウかチーターだ。

シリカは3本のピックをつかみ、投擲スキル トリプルシュート
を発動。

このスキルはただ3本の投擲武器を同時に投げるだけでなく、
複数のモンスターには自動で分散までしてくれる優れたスキルである。

三頭を同時に麻痺させたシリカは手近なモンスターから片付けて
いく。

二頭を倒したところで残りの一頭の麻痺が解除されたが、
ここでもピナがバブルブレスの幻惑できっちりシリカをサポート。

突進から三連撃につないでとどめとばかりに練習中のスキルを出
そうとしたシリカだったが、
後ろに見ている二人が気になって躊躇してしまった。

その隙をつこうと飛びかかるポイントキャット。

その攻撃を最近使い始めた防御スキル スウエー で上体を倒すことだけで回避するシリカ。

これまでシリカが使ってきた防御スキルは ステップ。

剣ではじき返す パリイ は重量級武器に対しては押し切られる方が多いので、除外。

そこで多様していたのがスキル 軽業 をいかしたステップ。

だが、これもせっかく詰めた距離を自ら離すことになるのが腹立たしい。

まあヒット&アウェイとする戦法なら理にかなってはいいるのだが。

そこに、キリトが第三の選択として スウエー を薦めてきた。

その場にとどまり上体の動きだけで攻撃をかわすこのスキルは、回避後即反撃につなげられるメリットがあるものの、攻撃を読み違えると大ダメージにつながる危険性もある。

それでもシステムで動く相手なので、あからさまな攻撃というものもまた存在する。

中間層内では上位グループに数えられるシリカはそれなりの経験を積んできているので、コツをつかむのは早かった。

そして今、見事に攻撃をかわしたシリカは相手の無防備な腹部に短剣を突き刺した。

そのまま空中でHPを消失したモンスターは爆散し、風に溶けて逝った。

一息ついてピックの回収に向かったシリカの耳に、ケイの声が飛び込んだ。

「シリカちゃん！　なんかこっちに向かってくる！！」

ピナの警告が無かったのにな？といぶかしみながらケイの指差す方向に目を向けると、
遠くに砂煙が舞い上がるのが見えた。

「ずいぶん、きよりがあ、あるみたい、ですねえ」

ユリののんびりした言葉が終る間にも砂煙は大きくなってきたが、まだなにが？といったところまではわからない。

「きゆるー！」

正体がわからぬまま眺めていると、ピナの索敵範囲にまで近づいてきていたようだ。

あらためて砂煙に目をやると巨大な黒い塊が認識できた。

だがその巨大さは一同の想像を超えていた。

まだ距離があるにもかかわらず、遠近法をあざわらうかのような巨体は、すぐ目の前にいると錯覚させるほどの圧迫感をあたえた。

巨体に圧倒されたシリカは思わず トリプルスロー を発動。

だが、オーバーアタックかと思われたその攻撃も巨体を麻痺させることはかなわなかった。

ここでようやく敵の正体が判明。野牛型モンスター クレーターパイソン。

扇状に盛り上がった背中中最長部は4mにも達しようか。

下げた頭部の大きさだけでも小柄なシリカはもちろん、女性としては大柄なケイをも上回る大きさ。

せり出した角の巨悪さはまさに圧巻であった。

「な、なによ、このどかい牛は!!!」

叫びながらも左右に逃れる三人。

といってもその巨体から逃れるにはかなり必死で走らなければならなかった。

それでも難を逃れた三人は走り去る巨牛を眺めていた。

「すっごく、おおきいい、です」

感極まった声でユリがいうと、

「ほんと。あれをステーキにしたら何百人分って量になるんだろうね」

と、一指し指を唇にあて、よだれをたらしそうな顔でケイ。

「あの突進を壁の人なら止められるのでしょうか？」

真面目な疑問を口にするシリカ。

「うーん、どうだろう？システム的には数値が上回っていれば止めるんだろうけど……」

「わかっててもおー、あの前にはあ、立ちたくないですー」

「だね。ありゃあ理屈じゃないね。」

のんびり話していた一回であったが、

「あれ？砂煙が大きくなってませんか？」

「えっ、離れてってんだから小さくなるはず……」

ケイの返事が終わる前にドンツと地響きが鳴り渡った。

「とまったあー、みたい、ですねえ」

どうやらブレーキの砂煙が舞っていたようだ。走り去ったと思っ
ていたが、

慣性のせいで止まるのにいままでかかっていたらしい。

「ひ、引き返してくるんでしょうか？」

「は、走り疲れたんじゃないの？」

だが、相手はモンスター、ヘイトされた相手を見過ごす気はなかった。

「うわっ、来るよー!!」

「にげろあゝ」

幸い、巨牛はその巨体ゆえか動きだしはすつごくのろかった。

だが、ゲートまではまだ一時間以上はかかりそうな距離を残していた。

このまま追いかけてこをしながら走り続けるのは無理っぽかった。

「シリカちゃん、ありったけのピック投げて〜」

シリカも必死で手当たり次第、麻痺ピックだけではなく、毒ピックも合わせて投げ続ける。

手元のピックがなくなると、アイテムから予備を取り出し再び投擲。

すべて使い切ったシリカが涙目でスモークストーンに手をかけたところだ、

ようやく牛を麻痺させることに成功。おまけに毒状態にもさせられて、シリカの顔に笑みがこぼれる。

「ケイさん、ユリさん！ここは手伝ってください！！」

「もっちろん！　いくよ、ユリ！！」

「は〜い、いつきま〜す〜」

ケイが突進の勢いそのままに顔の右側から大剣を振り下ろす。

ユリは大胆にも顔の正面に向かってジャンプ、体重をのせたメイスの一撃を巨牛の頭部に叩き込む。

シリカも負けじと左側からラツシュをかける。

ピナも三人の必死さが伝わったのか、なんと攻撃に参加、巨牛の右耳にかじりついた。

怒涛の攻撃をかける三人と一匹であったが、

「きゅるるー！！」

ピナが耳から口をはなし、警告の鳴き声をあげる。

「えっ、もう麻痺がとける？まだ一分たつてないのにつて、みんなあ離れて〜！！」

気付いたシリカの声にあわてて攻撃の手を止める二人。

だが大型武器ゆえにその動作はシリカよりもワンテンポ遅れた。

麻痺の解除をあらわす身震いにまきこまれ、ふっ飛ばされるユリとケイ。

だが、高レベル者の攻撃に加え、毒のダメージをも受けた巨牛も瀕死状態だった。

ただシリカの短剣では一撃でとどめとはいきがない。

連撃も、叩き込んでる間に首を振るだけではじかれそう。

あれしかないっ！ シリカは心をきめると走り出し、短剣の間合いの外から巨牛に向かって大ジャンプ、

「シリカキックック！！！」

巨牛の顔面に急降下のドロップキックを見舞った。

きっちりHPを削りきったシリカが恐る恐る振り向くと、

「シリカちゃん、パンツ見えたよ！」

「シリカちゃんのお、シマパン、げつとだぜい！」

いい笑顔でサムズアップする二人の姿があった。

……だから、使いたくなかったのに……

タイム 3 (後書き)

スキル 軽業 はみみ様よりお教えいただいた公式同人の情報を戴きました。

ただ、名前だけ戴いたので、効果が違ってくるかもしれません。御了承ください。

あと戦闘描写がSAOというよりはモンハンみたいになってる…0

r z

タイム 4

タイム 4

「ほらっ、シリカちゃん元気出して！かっこよかったんだから！」

「そうですねっ、『シリカキック！』って決まって、ましたよ
おっ」

「ううっ、もう言わないでくださーい。」

あられもない格好をさらしてしまつて落ち込むシリカをなくさめるケイとユリだったが、

話題にされると落ち込む要素が増えるという悪循環であつた。

「わかつた、わかつた。でも最後にひとつだけ、あの技名はなに？
プレイヤー名だからスキル名じゃないよね？」

「うぐっ、と返事につまるシリカ。「きゆるうっ」とピナがすかさ
ずなくさめる。」

「あの、あれは体術の師匠だった人から『大技を出す時は名前を
前につけて叫ぶと威力があがる』って
言われたんです。」

「ええ、そんなシステム、あつたんですかあ？」

「師匠いわく、『威力20%増(当社比)』だそうです。」

「ぶつ、なによ、その当社比つて。それ騙されてるから（笑）」

「い、いえ、私も信じてる訳では無いんですが、そ、その、大声で叫ぶとぶつきれるっていうか…」

「ああ、照れ隠しいなんだあ。でつも、それつてえ、やけくそお？」

身も蓋もないユリのつつこみだった。

「まあ、照れながら出す技じゃあ威力落ちるかもしれないから、あながち間違いではないかも？」

「そ、それはそうと、やっぱりあの牛さんはユニークモンスターだったのでしょうか？」

話題を無理やりかえるシリカに、

「そつだろうね。あのでかさにあのタフさだからね」

「ドロオツプウ、アイテムもお、すべてえ、A級でほしい」

特に気にせずに会話をつづける二人。（ドロップアイテムは先にシリカから見せてもらっていた）

ここでいうユニークモンスターとはフィールドに出現する特別なモンスターのことである。

特に決まった定義はないのだが、一般に同層内のモンスターより

大きな個体で

レアアイテムを落とすというのが条件といえはいええるだろうか？

すべてのフロアに配置されているわけでもなく、出現条件も未定なので出会えたらラッキーな存在だ。

(強さもダンジョンボス級なので常にラッキーとはいかないが)

今回は無事に討伐できたのでラッキーといえるのだが、本来の目的である黒猫に

未遭遇であることを考えると、運を使い果たしたのでは？と思わずにいられないシリカであった。

「きゅる？」

シリカが益体もないこと考えてると、右肩のピナが何か見つけたのか、

警告にしては微妙な鳴き声をあげた。

「どうしたの？ピナ？」

それには答えず、前方に飛び出したピナはブッシュの中に飛び込んだ。

「ピナはどうしたんだい？」

尋ねるケイに、

「さあ？私にもちよつと…」

首をかしげるシリカ。

とりあえず、ガサガサと音がするブッシュを眺めると、

「うわああああ!?!」

「えっ、うそお?」

「わっい、クロ猫さん、ですう」

そっぴナの鼻に押されて出てきたのは黒い子猫型のモンスターだった。

「ほ、ほら、ユリ、は、はやく!捕まえなきゃ!」

「お、おうっ、クロ猫、げ、げつとだぜい!」

「ち、違います、ケイさん、ユリさん落ち着いてください。直接捕まえても駄目です!餌を与えないと!」

「そ、そうね。そうだったわね。ふう、さあユリ、ここからは勝負よ!」

どちらの餌に食いついても恨みっこなしだからね!」

「ふっふっんだあ、負けませんよあ、ふふふ」

そんなドタバタした二人を無視してピナとじゃれあう黒猫。

うっ、私も触りたいと、うずうずしているシリカ。

そっごうしていると、

「じゃじゃ〜ん！」

口で効果音をだしながら、アイテムを右手に高々と掲げるケイだった。

「ケイさん、それは？」

「ふっふ〜ん、サバ缶よ、サ・バ・缶！　うちの猫も大好物だったのよー！」

サバ缶、正式には　ブルーフィッシュの缶詰　なのだが、その味からみんなサバ缶と呼ぶ。

何故、海の魚がいるのだとかいろいろ疑問はつきないが、低階層のころからNPCショップで普通に販売されていたアイテムだ。

（缶詰は携行食として人気が高い）

ただしここはサバンナ、魚なんて食べたことないよね〜とあきれ顔のシリカであった。

「ふっ、あまいですよ〜、ケイ、ゆうべのシリカちゃんの話い、聞いてましたあ〜？」

とって自信たっぷりユリが取り出したのは、ミルククッキーだった。

「ピナちゃんがぁ、食べたのはぁ、ナッツウ。なのでえ〜、お菓子をお、用意しましたあ〜」

いや、ピナの場合はたまたまなんだけど…、
でもどうせなにが正解なのかわかるわけもないので、結果を見守る
ことにしたシリカだった。

それぞれのアイテムをそ〜っと差し出す二人。

そして二人とも祈るように手を組んで目を閉じたので、シリカが結
果を見届けることになった。

まず、ケイのサバ缶に向かった黒猫だったが、ちょっと匂いをか
いだかと思えばふいっと顔をそむけた。

次にユリのクッキーに向かった黒猫は思いのほか熱心に匂いをか
いだ後、前足で転がす
といったしぐさまで見せた。だが残念ながら口にするまでにはいた
らなかった。

結果報告をするシリカに

「くう〜、次よ、次！」

と、くやしそうなケイに対し、

「えへへ、そうですね〜。ならあ、次こそはあ、げつとですねえ
」

と、うれしそうなユリ。

「よしっ、次はこのシャケフレーク（缶）で勝負！！」

「ならわたしはあく、チョコクッキーでえ、いきま〜す!」

あの鮭フレークは パールトラウトフレーク だからほんとは鱒
フレークだよな、と
どうでもいいことを考えているシリカ。

* * *

今度の勝負はどちらにも見向きもしないという散々な結果だった。

だがここでシリカはひとつのことが気になった。

「ユリさんのクッキー、最初はあんなに興味を持ってたのに、次は
見向きもしなかった。

一度確認したからというよりも、まるで別物だとわかったかのような
反応だった。

なら、最初と二回目との違いは…」

とそこまで考えたシリカに先程回収したアイテムの存在が思い出
された。

「ケイさん、ユリさん!このアイテムを試してみてください!」

そういつて取り出したのは、 クレーターパイソンの牛乳 であ
った。

シリカはピナ用に持ち歩いている水飲み用のお皿にミルクをいれて二人に差し出した。

「そうよ！子猫にはミルクよ！シリカちゃんえらい！！
そっかあ、私のサバ缶はまだ早すぎたのか？」

それは違うと思います、と心の中でつつこむシリカ。

「じゃあ、ふたりでええ、いつしよに、おきましよう」

ひとつしか無いお皿なのでそれも当然と、迷いもなくシリカから受け取ったお皿をユリにも持たすケイ。

そつと差し出されたお皿をじっと見つめる子猫。ドキドキしながら見守る三人。

そして緊張を裏切るあっさりしたしぐさで子猫はあたりまえのようにミルクを舌で舐めはじめた。

「やった〜、やったわ、ユリ！！」

「おう、クロ猫、ほんとに、げつとだぜい！！」

抱き合って喜ぶ二人、かわいいなあと、ミルクを舐める子猫を見つめるシリカ。

おいしそうに思えたのか、普段は飲まないミルクに口をつけるピナ。

ミルクが無くなり、トコトコと歩きだす子猫、だがここで異変が起こった。

子猫はまっすぐしゃがんで、シリカに向かうと、ポンとシリカの頭の上に飛び乗った。

「え〜、シリカちゃんのアイテムだったから、タイムしたのはシリカちゃんになるの〜?」

「ぶう〜、シリカちゃん、ずるいですう〜」

「ちょ、ちょっとまってください、ステータス画面をみればわかりますから」

あたふたと自分のステータス画面を開くシリカ。

画面の下の方にはタイム： フェザードラゴン とだけ表示されていた。

「あ〜、ある、ある！タイム： ストレイツォキヤット 1/2つであるよ〜」

「お〜、私もお〜、1/2ですう〜」

その言葉にほっとするシリカ。

「なら、なんでシリカちゃんの頭の上に行くのかな?」

「でも〜、うちらの子だからあ〜、いまはあ、シリカちゃんへの、ご褒美い〜?」

「ま、それでいいか。とりあえず戻ろう。もう日が暮れちゃうよ。」
なにはともあれゲートに向かう三人と二匹であった。

* * *

結局、子猫は35層に戻るまでシリカの頭から離れなかった。

なのでゲートを出たシリカを待ち受けていたギルド勧誘の面々が、すわっ、シリカ二匹目のタイム成功か？と色めき立ち、大騒ぎになった。

タイム 4 (後書き)

タイムはこれで終わりです。

次の章はシリカに足技を教えた師匠が登場です。

マスター 1 (前書き)

新章です

マスター 1

マスター

アインクラッド第26層

2024年 4月

「はなれて〜!!」

叫びながら横蹴りで ホブゴブリン をふっ飛ばすシリカ。

すかさず隣にいた別のゴブリンに短剣をふるう。

3撃目にクリティカルヒットが発生し、ゴブリンのHPは消滅。

だが、ポリゴン片へと姿を変える間にも2匹のゴブリンがせまってきた。

「こないで〜!!」

と、左脚での回し蹴りに頭部を直撃されたゴブリンは横のゴブリンをも巻き込んで倒れこむ。

「あっちいけ〜!!」

倒れたゴブリンに走りこむシリカは、勢いもそのままにサッカーボールキックを振りぬく。

回し蹴りをくらったゴブリンはその一撃で消滅。

だが、それでおもしろがなくなった巻き込まれていたゴブリンが立ち上がろうとするとところに、

「寝てなさいっ!!」

振り切った脚をそのままに、かかとおとしへと移行。
容赦なく振り下ろされた攻撃はクリティカルとなって一撃で消滅。

そこに始めにふっ飛ばされたゴブリンが駆け寄ってきた。余裕を
持つて待ち構えるシリカ。

「飛んでけっ!!!!」

タイミングをはかって繰り出されたローリング・ソバットに、
宣言どおり飛んでいったゴブリンはそのまま着地せずに消滅した。

そのまま奥に進み、ダンジョンボスであるゴブリンリーダー
に対峙するシリカ。

状態異常は効かないので、投擲武器は使用しない。ダッシュでボ
スに向かうと、

「あたつてっ!!」

掛け声と共に飛び蹴りを顔面にお見舞いする。

後方に吹っ飛んだ上に、反動を殺しきれず、ゴロゴロ転がるゴブ
リンリーダー。

それを追いかけ、

「シリカキック!!!!」

急降下のドロップキック&踏みつぶしで追加ダメージをあたえる。

すでに瀕死状態となったボスがふらふらと立ちあがるのを待って、

「月までとんでけ〜!!!!!!」

とどめにしてもオーバーアタックぎみの大技、サマーソルトキックを繰り出すシリカ。

一回転して着地した目の前には、爆散したボスのかけらすらも見当たらなかった。

「やっぱり、声を出すほうが調子いいんだな……」

快勝にもやや気落ちした声でつぶやくシリカ。

ここはかつて、経験値獲得スポットとして人気をはくした洞窟型の小ダンジョン。

奥にいるゴブリンリーダーを倒さないかぎり、無限に湧くゴブリン達。

(ワンパーティー五匹で固定。殲滅後、2分で復活)

そしてリーダーを倒した後はMOBのポップが無くなり安心して戻れる。

それゆえに、ほとんどのプレイヤーが幾度も訪れた場所だった。

シリカも適正レベルの時にはよく利用していたのだが、最近も体術を覚えるための練習にと、

師匠にあたる人物に連れてこられ、お世話になった場所でもあった。

(師匠は『練習』ではなく『修行』だといっていた。)

シリカは朝からこのダンジョンでゴブリンを倒し続け、昼近くになつた今、

休憩するために　ゴブリンリーダー　を倒してきたのだった。

もちろん今のシリカ（Lv48）にとってここの経験値など雀の涙に等しい。

それでも安全にスキルの経験値をあげるなら、危険を排除し、余裕を持って繰り返せる
低層ダンジョンはうってつけであった。

投擲スキルが700を超えたことで、本格的に体術スキルをあげようと、
いまや来る人のないこのダンジョンにシリカは足を運んだ。

これまで消極的だった体術スキルの使用に前向きになったのは、あるアイテムを購入できたからだ。

それはオーダーメイドのレギンス、しかもAGIに補正がつく最高級品であった。

以前、同行したメンバーにあられもない姿を笑われたシリカは、望みの装備を手に入れるべく、
各主街区を探しまわった。

そもそもシリカがズボン履かないのは、初期装備に女性用ズボンが存在しなかったからである。

それでも、デスゲームなのに防御に不安のあるミニスカートではあんまりだと、

NPCショップを見に行った。

だが、それでも女性用の下半身防具はミニスカートしかなく、男性用を女性が装備することはシステム上、不可能だった。

しかし一年以上がすぎたアインクラッドでは裁縫スキルがMAXに達したプレイヤーも現れ、ボリウムゾーンの主街区では思い思いのファッションを装うプレイヤーが増えてきた。

そこでシリカもオーダーメイドでおしゃれなズボンを作ってもらおうとプレイヤーショップを訪ねた。だが、そこでシリカは驚愕の事実を知ることとなった。

このSAOを管理するカーディナルには女性用ズボンは存在しないというのである。

そもそも裁縫スキルといっても実際に針と糸で洋服をつくる訳ではない。

デザインを強く思い浮かべながら素材をスキルで加工していくとある段階で素材が光につつまれ装備が完成するのである。

そしてプログラム上の存在である装備には基本パターンが存在し、裁縫師は素材の組み合わせや丈の長短、局所的なシルエットの変更などで違いを表現する。

そして女性用ズボンが無いことが判明したのは、マスター裁縫師がそれ用の作成スキルが存在しないことを発表したからである。(男性プレイヤーは『運営グッジョブ!』と歓声をあげた)

ただし、ホットパンツが存在することはそれより以前に知れ渡っていた。

だが、シリカはそれも選択することはできなかった。

なぜならホットパンツ全般が超ローライズであったため、身体のできていないシリカには止まる所が無かった。

まあ、実際は履けても恥ずかしすぎて選ばなかっただろうが…

それからもいろいろなショップを覗いてみたが、どこもよい返事はなかった。

あきらめかけたシリカが訪れたあるショップの裁縫師が、

「見えても大丈夫な下着ならつくれるわよ。」

と、逆転の発想ともいうべきアイデアを出してくれた。

(実際は、シリカの思考が固まっていただけで、見せブラまで存在するSAOではそこまで珍しいものでもない。)

ならばとレギンスを提案したら、鎧下に着用するアイテムに似たものがあるので可能であるとの返事。

さらに、いい素材を使えば防御もあがるし、ステータスに補正もつけられるけどどう？

と、薦められたので、思い切って購入することにした。

これで体術を使用する際の問題点のひとつは解消した。

(ただし、夏がきたらどうしよう?といった悩みも存在してはいる

が…)

そこでもうひとつの問題点をも一気に解決しようと、いさんで低層ダンジョンに乗り込んでみたものの結果は芳しくなかった。

無言で繰り出すスキルはどれも威力が落ち、ふっ飛ばし効果のある攻撃も、

ひるますだけにとどまるといった散々たる結果に終わった。

もう少し無言の練習を続けるか、それともあきらめるか、悩みながら洞窟を引き返していると、前方から声がした。

「おや？シリカも来ていたのか？」

マスター 1 (後書き)

婦人服の場合、ズボンではなく、パンツというのが一般的ですが、表現上、下着と区別がつかないので、あえて使用しました。

あと、ローライズに関しては完全に推測の域を出ません。

書きながらホットパンツの存在を思い出したので、それを履かせないためのこじつけです。

マスター 2

マスター2

「おや？シリカも来ていたのか？」

声をかけてきたのは、シリカがよく知る20代の女性だった。

「あつ、チュンリーさん！」

「こらっ、違うだろ！私のことはマスター師匠と呼ぶように言っただろっ。」

「あつ、はいっ、すみません師匠。」

慌てて頭を下げるシリカ、それを腕を組み、うむ、うむと、うなづく彼女のしぐさは

どこか芝居がかって見えた。

背中に棍を背負った彼女のいでたちはといえば、髪は上の方で二つにくくって団子にまとめてあり、

その装いも、

「ところで師匠、装備かえたんですね。」

と、シリカがおもわず指摘してしまったように、チイイナ服をベースとしたもの、

というか格闘ゲームの女性キャラそのものであった。

「ああ、私もついに裁縫師をマスターしたのでな。ようやく念願のコスプレができるようになったわけだ。そうだ、今度シリカの分も作るうか？ そうだな…、シリカなら巫女風のキャラが似合いそうだな。」

「…機会があれば…」

コスプレは勘弁してほしいシリカだった。
（ちなみに緋袴は存在する。が、巫女服との一式装備のため、シリカは選択しなかった）

彼女は高校時代からレイヤーだったそうで、このSAOを始めたのも、ゲームキャラのロープレをするためだった。
それゆえ、スキルも体術をメインに、カンフーらしい武器として棍をチョイスしていた。

シリカがいう師匠マスターというのは体術のほうである。

「ところで、師匠もここに來たってことは、やはり修行ですか？」

『修行』とか『特訓』などの言い回しを好む師匠に合わせてシリカ。

「当然だ。こんなところにただ散歩に來る馬鹿はいないだろう？」

「やはり、その、新しい武器のためですか？」

「まあ、そんなところだ。スキル攻撃はあらかた覚えたんだが、通常攻撃が難しい。」

さすがエクストラスキルだけのことはあるな。」

彼女は今背負っている棍の他に、三節棍と呼ばれるエクストラ武器の使い手でもあった。

エクストラスキルとはある武器やスキルを使いこなすことで、特別に発言するスキルのことだ。

三節棍の出現条件は棍と体術をマスターすることでは？と言われている。

確定でないのは、今のところ彼女以外に発現したプレイヤーがないため、彼女の証言以外に検証がされていないからだ。

高レベルの攻略組にさきがけ、彼女が最初にエクストラスキルを発現させたことを奇妙に思われるかもしれないが、理由を知れば格段驚くほどのことはない。

まず攻略に邁進するようなプレイヤーは棍などのマイナーな武器をそもそも選ばない。

彼らの最優先は効率にあるので、趣味をつらぬきながらトップグループに居続けるプレイヤーは極少数派となる。

さらに攻略を重視するプレイヤーはレベル上げにこそ重点を置き、スキルの成長は成り行きまかせにされている。

逆に中層でぶつちやけ暇つぶしに狩をしている大多数のプレイヤーは完全に趣味優先である。

さらにスキルをマスターすることで優越感も味わえる。

そしてエクストラスキルを最初に発現させようものならその注目度は段違いに跳ね上がる。

なので、結構な数のプレイヤーがわれこそは最初のエクストラスキル発現者になろうと、
マイナー武器を手がけてはレベリングの効率を無視してスキル上げに邁進している。

もつとも癖がありすぎて上手く使いこなせていないプレイヤーが多数いることも事実なのだが…

一応、スキルは選択していると通常攻撃にもアシストはつく（でなければ、現実世界では使うことが皆無であろうハルバードや斧などの巨大武器はまともに扱えない）のだが、
動きの連携はその場その場で自分で選択することになり、そのためには武器の特徴やくせをしっかりと把握する必要がある。

現実世界とアクセスできるのであれば、ネットの動画などでイメージを固めることも可能なのだが、
現実から隔離されたこの世界ではすべて自己解決するしかない。

彼女は以前にやったことのある格闘ゲームの記憶を元にイメージすることで補ってきたのだが、

三節棍の動きは複雑さを極め、うる覚えのゲームのモーションだけでは半分も使いこなせていないと感じていた。

「わかりました。それではこの場所は師匠にゆずりますので、どうぞ。」

といっても、いまボスを倒したばかりですからリポップまでは一時間ほど待たなければいけません。」

引き上げようとするシリカには師匠の教えをたがえようとしていくことへの後ろめたさがあった。

「ん、シリカが先に来ていたんだ。遠慮はいらないぞ。それにひさしぶりに弟子の上達ぶりも見てみたいしな。」

と、あたりまえじゃないか、といったかんじで師匠があっさりと同行をもうしでる。

「まあ、ゴブリンどもが出てこないんなら、こんなジメジメしたところにおいても仕方ない。いったん外にしよう。」

しゃべりながらUターンして戻りだす師匠。さっさと歩いていく師匠の後ろを慌てて追いかけていくシリカ。

「きゅ〜る〜」

ピナがあくびのような間延びした鳴き声をあげた。

*

*

*

「師匠はお昼を食べました？」

ダンジョンを出たシリカは、前をゆく師匠に尋ねた。

「ああ、ここに来る前に食べてきた。シリカは弁当持参か？」

「はい、来る前にサンドイッチを買ってきています。

私が食べてる間、師匠は近辺で狩でもなさいますか？」

「それもいいが、せっかくだ。シリカの最近のはなしを聞かせてくれないか？」

そういえば黒猫のタイムに成功したとかどうかってトピック掲示板に出していたが…」

*

*

*

「ほう、そんなユニークモンスターがいたのか… おもしろそうだが、ちよつとでかすぎるな。

やはり体術や棍を試すなら人型モンスターが一番だな。」

「そうですねえ、獣型には上段攻撃がほぼ無効になりますから…」

と、なんか受け答えが格闘少女っぽくなっているシリカ。

食事を終え、いまはピナにナッツを投げ与えている。

「ハツハ、シリカもわかってきたじゃないか！ にしてもピナは

器用だな。それでスキルもあがるんだろう？
話の中でも上手く使いこなせているようだし、うん、いいスキルを
選んだな！」

「はいっ！とつても便利です！！ 師匠も使ってみられては？」

自分のことよりもキリトが選んでくれたスキルが褒められたのが
うれしくて、
ついテンションがあがってしまったシリカだった。それを感じたの
か、

「きゅるるう〜」

主に合わせてうれしそうな声をあげるピナ。

「まあ、便利そうだが、私の趣味には合わないかな。三節棍になっ
てリーチも伸びたし、
あまり手間どるようなのを相手して冒険する気も無いし。」

「では、あれからダンジョンの方は…」

「ああ、ずっとごぶさただね。興味ないってのもあるけど、
この三節棍じゃパーティ戦がやりにくくてねえ〜」

派手に振り回してこそが三節棍の醍醐味なのだが、
パーティだと味方をも巻き込んでしまうのである。

「まあ、フィールドでのレベル上げにはちよくちよく参加している
けど、
そんな時も完全に別行動しているな。」

「はあ、なんかそれはそれでたいへんそうだね…」

それはいわゆる「ぼっち」と呼ばれる状態なのでは…

「な〜に、私は充分この世界を楽しんでるよ！ シリカも無茶しちや駄目だよ！」

冒険なんてしなくても生活費だけならここらのゴブリン共でだってお釣りがくるんだから！！」

心配してくれる師匠の真摯さに胸が熱くなるシリカだった。

マスター 2 (後書き)

またまた外観が既存キャラのパクリです。すみませんorz

マスター 3

マスター3

「さて、そろそろいこうか。あんまりぐずぐずしていると、天気がよすぎて眠ってしまいそうだ。」

立ち上がりながらチュンリー。

ポンポンとお尻をはらって砂をはらうしぐさ。(仮想空間なので、実際、汚れはつかない)

「はいっ!? あつと、そうですね、いきましよう。」

実はちょっとウトウトしていたシリカだった。

ホント、いい天気、と空を見上げるシリカ(構造上は天井になるんだらうけど…)

これからあのジメツとした洞窟に入るのかと思うと、ちょっと気がめいる。

そんなシリカに気付いたチュンリーは、

「なんだあ? 気合いがはいつていないな! 師匠の前でその態度はいいだけないなあ。」

なんなら主街区で朝まで特訓に切り替えるか? 「

「いえ! 気合い入ってます!!! バッチリっす!!!」

「きゅるる〜!〜!」

慌てて直立し、必死に答えるシリカとピナ。

「よしっ、それじゃいくぞ! ホント気を抜くなよ! いくら低層域でもなにが起こるかわからないんだからな。」

「はい!〜!」 「きゅ!〜!」

*

*

*

「で、師匠、今回も体術のみですか?」

最初の指導の時を思い返して尋ねるシリカ。

「いや、今回は普通に戦ってくれればいい。短剣とのコンビネーションも見たいしな。」

なんか逆にハードル上がってない? とちょっと緊張してくるシリカだった。

*

*

*

「きちちゃ、だめえ〜」

洞窟にシリカの声がこだまする。

あらわれた ホブゴブリン 五匹のパーティにシリカが先制のフ
ロントキックを浴びせた。

コロリと後ろに転がりながら倒れるゴブリン。

その間に距離を詰めてきたゴブリンが手にした棍棒を振り上げる。

「あたらない!」

クルリとその場でターンしながら後ろ回し蹴りをゴブリンの腹に
叩き込む。

その場につづくまるゴブリンに手にした短剣を斜めから振り下ろ
す。

急所である頭部の攻撃にゴブリンのHPは全損。

それに目もくれず、次に近づいてきたゴブリンに、

「くらっつて〜!」

飛び膝蹴りを顔面にクリティカルヒット。その派手なエフェクト
を確認すると、

近寄るゴブリンをあえて無視し、先にフロントキックを当てたゴブリンに向かった。

短剣の突進スキルを発動させ、一気にHPを削りきる。

置いて行かれたゴブリン二匹が並んでこちらに向かってくる。

シリカはタイミングをはかって、横の壁に向かってジャンプ。

「これでっ、きめるっ!!!」

スキル 三角蹴り が見事に命中。横ではシリカを見失ったゴブリンが戸惑っている。

隙だらけのゴブリンに短剣の三連撃スキルで攻撃、間髪いれずに、

「どいてえ〜!!」

トウキックでとどめを指す。

三角蹴りのダメージでフラフラと立ち上がるゴブリンに向かってジャンプ、

空中で一回転しながら、

「いつけえ〜!!!」

と、頭部にかかとかからの浴びせ蹴り。着地も見事に決め、

「どうですか？師匠」

ふりかえり、チュンリーを上目づかいに見るシリカ。

「きゅる〜」

“おつかれさま”とでもいうように、シリカのほほに頭をこすりつけるピナ。

「いや〜、お見事、お見事。技の選択もいいし、短剣との連携もバツチリだ。

なによりも 三角蹴り とは驚いたよ。体術マスターの私でも発現していないスキルだぞ。」

驚くチュンリーだが、理由もだいたい想像内だ。

「足技のみに限定したことがこれほど効果があるとは……」

『足技のみ』、これがシリカの多彩なスキル発現のからくりだった。

体術の基本技は、パンチ、キック、体当たりの三つ。

そして使う頻度により、発現するスキルが変わってくる。

普通は体当たりよりはキック、キックよりはパンチの方が使用頻度は高いだろう。

多くのプレイヤーが満遍なく使って育てることをチョイス。

ある両手剣のプレイヤーはサブスキルと割り切って、キックだけを使用。

彼が発現させたスキルは、スキルレベル300の時点ですでに均等に育てたプレイヤーのそれとはまったくの別物であった。

この情報は 時代にすでに判明しており、多数のプレイヤーが知ることとなった。

だが、刃物を持つMOBが多いSAOで、体術はあくまでもサブスキルの扱いでしかなく、マスターしようとするプレイヤーはよほど酔狂な人物でしかなかった。

(現時点で体術マスターはチュンリーのみ)

チュンリーがシリカに体術を教えるにあたり、足技のみとしたのはシリカのサイズが主な要因だ。

小さいシリカはパンチではリーチが短いし、体当たりも大型MOBなら足にしか当たらない。

なによりリーチが短い短剣を補うのに、それよりもリーチの短い攻撃を持っていても意味が無い。

というわけで足技のみというより、足技しか使えないという状態だったわけである。

(キリトからのメールにもそのことについては言及していた)

「うーん、今、シリカの体術はどれくらいなんだ？」

それでもあまりなスキルの多彩さに、首をかしげるチュンリー、

「え〜と、今の戦闘で517ですね。三角蹴りは500の時に発現しました。」

と、ステータスを開きながらシリカ。

「500!?む?いや、待てよ、シリカは軽業もスロットに入っていたよな?」

なにか思い当たったのか、尋ねるチュンリー。

「あ、はい。割と初期の頃から使っています。」

MOBには2mを超す人型がざらにるので、軽業がないと急所の頭部や首に届かなかった。

「うむ、なら軽業と複合しての発現と考えるのが妥当か…。まさか補助スキルまで影響があるとは、ホントSAOの世界は奥が深い。」

それにしても二カ月で500越えか…。この娘のがんばりの要因はなんなんだろう?

せっぱつまった様子は無いから大丈夫だとは思いが…

チュンリーがシリカに直接尋ねるかどうか迷っていると、

「師匠、次が来ました!いつてきます!」

「きゅるっ!」

シリカとピナの声にハッと我に返り、

「あ、ああ、気をつけるよ。と、今度は別のパターンで倒してみろ
」!

とりつくろつように師匠らしく注文をつけるチュンリー。

「はいっ!!--!」 「きゅ!きゅ!!--!」

いい返事のシリカとピナ。

張り切る一人と一匹を見送りながら、

「死なないように頑張るんだよ…!」

やさしくないこの世界の現実に思いを馳せるチュンリーだった。

マスター 3 (後書き)

シリカの掛け声はラピユタのシータのイメージです。

マスター 4

マスター 4

それからシリカのゴブリン退治はつづき、湧き出しも15回を数えた。

最後のゴブリンを飛び蹴りで倒し終えたシリカが、

「あっ、師匠、新しいスキルが発現しました!!!って、これは複合スキル?」

びっくり目でチュンリーとステータス画面を交互に見ながら言った。

「ほう、今度は複合スキルか…まったく今日は驚かせられてばかりだな。」

驚いてるとはとても思えない口調でニヤリと笑うチュンリー。

「試しにモーションを発動させてみてくれないか?」

「はいっ、やってみます!」

元気よく返事スルシリカを微笑ましく見つめるチュンリー。

「いきますっ!」

力強く宣言すると、シリカは身体の色を抜き、スキル発動による自動的な動きに身を任せた。

まず反応があったのは短剣を持つ右腕だ。

下段のまま左腕の方にひきつけられた。

それと同時に右足を前に半身の構えとなり、相手に背中を見えるほど、上半身がひねられた。

引き絞った弓が放たれる勢いで短剣が左下から右上へと振り切られた。

振り切った勢いをそのままに、右足を軸に回転。

その時にはすでに左足が右腕に引っ張られるかのように回し蹴りのモーションを発動。

当たる寸前まで膝を曲げた至近距離タイプの回し蹴りが仮想敵の頭部を捉えた。

その瞬間、軸足だった右足がちを蹴った。

回し蹴りの回転の勢いを殺さずに右足が放ったのはローリングソバット。

さらに着地した左足を軸にもう半回転。

いつのまにか逆手に持ちかえられた短剣を敵の横腹であろうと思われる位置に突き刺した。

そのままの体勢で固まるシリカ。それを見て、カウントを始める
チュンリー。

「1、2、3…」

3を数えたところでシリカの膠着がとけ、「ふう〜」と深く息を吐いた。

「切り上げから旋風、そして刺突か…なかなか強力そうなスキルだが膠着が3秒は長いな〜」

「えっ、え〜、そうですね…」

強力と聞いて喜び、膠着が長いと難しい顔で言われて落ち込むシリカだった。

「きゅっ、きゅっ〜」

励ますようにシリカの頭をついばむピナ。

「まあ、なんにしるここのゴブリンどもではオーバーアタック過ぎて試せないな。」

おそらく右足のソバットの段階で確実に倒せるだろうし、クリティカルができれば左回し蹴りで終わる。

「で、どうする？まだゴブリン退治を続けるか？」

「う〜ん、そうですね…、次をラストにして後は街に戻って今のス

キルを練習します。」

「おっ、そうか。それなら最後は私にやらせてくれないか？その後、いつしよに街に戻ろう。」

「えっ、師匠も戻られるんですか？せっかく来たのに一度だけなんて…」

「なぐに、こんな辺鄙な場所、いつだって来れるさ。それより弟子の修行を見届けないと、な？」

と、ウィンクするチュンリー。

確かに、誰かに動きを見てもらうのは、スキルを使いこなす上で強力なサポートとなる。

それ事態は歓迎することなのだが…

「師匠は完璧にできるまで終わらせてくれないから…」

と、基礎練習を振り返って、うんざりするシリカ。

そんなシリカの気持ちを知ってか知らずか、ウィンドウを開き、背中にしよった棍を収納するチュンリー。

「あつ、そう言えば師匠、三節棍は常備していないんですね。」

「ああ。使いこなせていない武器をこれみよがしに装備してもな…」

ちょっと照れくさそうなチュンリー。

だが、チュンリーの三節棍での戦闘を見たことのあるシリカは、

「あれで満足できないなんてっ、ホント、師匠は凝り性なんだから……」

あきれていた。

チュンリーは三節棍を右手に装備すると、前に放り出すし、地面にはわせた。

「これは別の武器のモーションだったんだが、使えそうなんぞでな……」

シリカに解説しながら、ニヤリと笑うチュンリー。

ようやく現れたゴブリンを見て、チュンリーは、

「振り回すから、下がってる!!」

とシリカに注意をいれると、三節棍を持つ右手を上下に振った。

波打つように動く三節棍の先端が跳ね上がり、先頭のゴブリンの股間にヒット。

そしてバレリーナのように右足だけでつま先立ちになり、回転を始めた。

はじめは下げられていた右手が回転に合わせて上へと持ち上げら

れる。

それに遅れて三節棍の先端も浮き上がってくる。

左足でリズムを取りながら、ゴブリン共に目もくれず、回り続けるチュンリー。

三節棍の竜巻のような状況はわずから回転でゴブリンを全滅、6回転目で手ごたえが無いことに
気付いたチュンリーは、7回転目で動きを止めた。

「うーん、すぐ止まれないのが欠点だな。」

と、ぼやきつつ、武器を収納するチュンリー。

「あれ？師匠、リーダーは？」

「ああ、弟子に見本を見せてあげようと思ってね。といっても足技のそこだけだが…」

そのまま武器を見装備のまま、ゴブリンリーダーに向かうチュンリー。

シリカのスキル発動の時と同じ構えを取ると、ゴブリンリーダーが片手剣で斬りかかってきた。

ゴブリンリーダーの斬りおろしを、左足を後ろに引いてかわすチュンリー。

攻撃をかわされ、隙を見せるゴブリンリーダーにチュンリーの左

足が跳ね上がる。

前かがみになっていた頭を蹴られ、のけぞるゴ布林リーダー。

その無防備な胸元に突き刺さる右足のソバット。

チュンリーのスキルはここで終わる。

すでにゴ布林リーダーのHPバーは真っ赤に染まり消滅を待つのみだ。

だが、一呼吸分の膠着がとけると、チュンリーはそのまま半回転して右手の裏拳を叩き込んだ。

そのフィニッシュの形は先程のシリカのそれであった。

「ま、最後のはおまけだ。」

チュンリーの言葉にゴ布林リーダーの破碎音が重なった。

ほう〜つと見とれるシリカの背を叩き、

「さあつ、戻って特訓だ！！ 合格と認められるモノができるまで帰さないからな！！！」

……ああ、いま自分の顔は真っ青なんだろうなあ、縦線が入っているかも……

マスター 4 (後書き)

オリジナルの技の登場です。

マスター 5

マスター5

「ほら、また足が下がってきたよ！ちゃんとイメージして！」

訓練所にチュンリーの怒声が響き渡る。

あれから26層の主街区に戻ったシリカ達は、街のはずれにある訓練所に来ていた。

この訓練所にはかかしと呼ばれるわら人形が設置されており、プレイヤーはここでスキルの試技や練習ができる。

ちなみにこのかかし、斬っても斬ってもすぐ元に戻るので『呪いの笑い人形』とも呼ばれている。

訓練所は主街区のすべてに設置されており、ここでの練習でも微小ながらスキル経験値を獲得できる。

シリカはかかし相手に、先程発現したばかりの短剣と体術の複合スキル トルネード・エッジを練習していた。

シリカが苦戦しているのは、2撃目の左回し蹴りだ。短剣の切り上げからつづく攻撃なのだが、短剣の間合いでは回し蹴りを繰り返すのには近すぎてきゅくつなのだ。

スキルでは膝を曲げることで対応しているのだが、これまで遠心力をいかして振り回すかんじの
回し蹴りの練習をしてきたシリカには違和感がぬぐえなかった。

「こつ、ほらつ、膝で顔面を蹴る気持ちで！この身体は完璧に動くんだ！！」

目の前の顔面だって蹴れるんだよ！！！！」

そう、デスゲームといつても今の身体はバーチャル、それこそゲームの動きを完全に
再現することも可能なのだ。

だが、チュンリーも伊達や酔狂で動きに完璧を求めている訳ではない。

装備で威力を補強できない体術はモーションの完成度でダメージに変動がでるように
設定されている。

完璧なモーションで繰り出されたスキルは基準モーションの1・5倍の威力を叩きだす。

だが、基準以下のモーションでもスキルは一応発動するのが厄介な点なのだ。

最低限での動きで発動したスキルの威力は基準値の0・7倍。
完璧なそれと比べれば倍近い差がついてしまう。

だが実際は、そこまでこだわらないプレイヤーが多数派をしめる。

何故といっても、体術はサブでしかなく、ダメージよりも敵の体性を崩すことでよしとする。

メインアタックに組み込むチュンリーの方がかわっているのだった。

ただ、シリカの求めるものもそれであったため、

「チュンリーさんと知り合えてよかった…」

内心で数奇な縁に感謝するシリカだった。

* * *

シリカは例のごとくダンジョン探索に誘われたパーティーでチュンリーと出会った。

だが、チュンリーももとのパーティーメンバーではなく助っ人だった。

始め4人組のパーティーが二手に分かれて、メンバーを勧誘。

まず二人がシリカを見つけ、勧誘。交渉しているところに、別の二人が勧誘を無視して歩くチュンリーを追って合流。メンバーどうしが声を掛け合う中、そこにいるシリカを見たチュンリーが、

「この娘といっしょなら付き合っよ。」

ということでシリカを含む六人パーティーが組まれたのだった。

探索は特に問題もなく終わり、その場はフレンド登録をしまつて別れた。

別れ際に、チュンリーが、

「私はこれからはスキルの方を重点にあげていくつもりなんだ。裁縫もあげるつもりだからマスターしたらシリカちゃんの服もつくってあげるよ。」

と言ってくれたが、特に連絡をしあうわけでもなく月日が流れた。

チュンリーがエクストラスキルを発現させたと聞いた時はお祝いのメールを送ったが、その時点でも

まさか自分が弟子入りすることになるとは想像もしなかったシリカだった。

だが、二か月前に出会ったキリトが、メールで足技主体の体術を薦めてくれた際、

「誰か、体術を高レベルにしているプレイヤーに見てもらおうのがいい」

とのアドバイスに従い、チュンリーに連絡をとったのだった。

快諾してくれたチュンリーだったが、その完璧主義に一晩中かかしを蹴らされ続けたシリカは、

「選択間違えたかも…」と一時は後悔し、ピナに泣きつくシリカだった。

*

*

*

「よしっ、モーションが崩れなくなったな！いいか？これからも宿に戻る前にかかし相手に動きを反復すること！！どうせこの身体に肉体的疲れはないんだ。鍛えるのは、脳！、イメージ！！それを忘れるなよ！！！」

「はいっ！！！^{マスター}師匠！！！！」

「きゅー！きゅっ！！！」

ようやく合格をもらえ、元気よく返事するシリカとピナ。

「それじゃ、食事にでもいくか？新しいスキル発現のお祝いだ！私が奢ろう。」

え、そんな…と遠慮しようとしたシリカだったが、年齢差を考えるとかえって失礼だと思い直し、

「ありがとうございます！師匠！！！」

「きゅるつきゅー！」

素直にお礼をいうシリカ達だった。

「よしっ、今私が滞在している42層にいいレストランがある。そこに行くぞー！」

*

*

*

「しっかしなあ、シリカ。あの掛け声はなんとかならんのか？」

まさかのチュンリーの駄目だしに、

「ガン、師匠の教えを守っていたつもりだったのに…と、シヨックを受けるシリカ。」

「え、師匠がおしゃった『気合いとイメージを乗せた掛け声』を実践しているつもりなんですけど…」

と、だんだんと声が小さくなるシリカ。

「いや、確かにそう言ったけど、『えいつ』とか『や』とか普通の掛け声があるだろう？」

あきれ顔でシリカをみるチュンリー。

「なんか短いのだと、タイミングが合わなくて…」

「まっ、本人がいいならOKか」

いや、本人も納得していませんから…と内心でつつこむシリカ。

「それに、ここまでスキルを伸ばしたんだ。もう変えられないだろうな。」

うそ？ならずつと叫びながら使うの？恥ずかしいよ〜

「そ、そうなんですか？」

それでもなんとかならないかとあかくシリカに、

「ああ、ずっと言ってるようにスキルはイメージだからな。ここまです使ってきたんだ。

もはや掛け声まで合わせてのイメージだろ。」

あっさりとどめをさすチュンリー。

「シリカが使うならかわいらしくていいかもな。うん、かわいいは正義だ！！」

よくわからない定義で話をまとめるチュンリー。

仕方無いか…、だって掛け声無しだと上手くいかなかったんだし…

あきらめたシリカは他に気になっていたことを聞いた。

「あの、師匠、今日は私になにか用があったんですか？」

「うん？何故そう思う？」

「え、だってあそこのゴブリンじゃ師匠の修行にならないんじゃないかな
いかなって…」

通常攻撃の練習に一撃で倒せる相手では役者不足だ。
それこそただ武器を振り回すだけで終わってしまう。

「はは、まいったな。そのとおりだよ。用ってことはないんだが、
まあ、弟子の成長具合を見たかったってのと…」

ここでちょっと言い淀んで、表情をひきしめるチュンリー。

「昼にフレンド画面を見ていたら、シリカがゴブリン洞窟にいるの
がわかってな。

いまさらあんな場所につきあうプレイヤーはいないだろうからソロ
だろうと…」

あそこのレベルならソロでも問題ないと教えてくれたのは師匠な
のに…

と、シリカが首をかしげていると、

「今、PKギルドが横行しているからな、心配になって結晶かかえ
て見にいったってわけだ。」

「オレンジギルド…」

二か月前に出会った恐怖を思い出し、震えるシリカに、

「オレンジじゃない。レッドだ。殺しのために殺すギルドだ。」

さらにショッキングなことを口にするチュンリー。

「トップギルドが壊滅に乗り出しているらしいが、用心するに越したことは無い。」

「ソロでフィールドに出るのは絶対、駄目だ！ できれば生産職でも始めて主街区から出ないでほしい。」

真摯なおもむきにきつめな声で忠告するチュンリー。

「生産職でもレベルはあがるし、貯えもあるんだろうっ？ どうしてもでかけるのなら私に声を掛けてほしい。メンバーを集めてあげるから、な？」

「ありがとうございます。その時は頼らせてもらいます。」

肯定の返事を返しながらも、これからどうしようか悩むシリカであった。

マスター 5 (後書き)

ストック分はここまでです。以降の更新は未定です。

誤字、脱字、苦情、批判は感想にて受け付けています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7634z/>

ソードアートオンライン シリカの冒険

2011年12月25日00時48分発行